



くちなし
さをり

作男の次太郎がお嫁さんを貰つて、小さな家を持つた頃、私は六つばかりのおかつばでありました。何かで牡丹餅を拵へた時、次太郎の所へは私がお使をして、お重を提げて行きました。次太郎のお嫁さんは、白い手拭を姉さまかぶりにして、鼻と口だけ見せて、

「ようおくりやあしたなも。」

と、やさしい聲で禮を言つて、からの重箱を返して呉れました。

次太郎の家を出ると、路の片側は村一番の物持の石垣が高く積み上げられて居り、片側は役場の使あるきをして居る源兵衛爺さんの家の生垣になつてゐました。檜葉か何かの、あまり高くない生垣の内側に、梔子の木があつて、赤く熟した實が、いゝ色艶をして、葉の間から覗いて居ました。

からの重箱を提げた私は、梔子の赤い實を見附けると、足を止めて動かなくなりました。あれで白絲が染められる。絲の一端を口にくはへて、他の端を左手でびんと張つて、梔子の實の切口で二三度絲をこする、すると白絲が立派に樺色に染まつてしまふ。染まつた絲で手



毬をかがる。かがつた手毬が眼に浮ぶと、手の屈きさうもない梔子の實が矢も楯もなく欲しくなつて、私は重箱を下に置いて、下駄を脱いで、生垣の根元の小高い土手に登りました。

生垣の檜葉を搔分けて、内側の梔子の枝を擽むと、赤い實の一つをもぎ取らうとあせりましたが、あせつても、あせつても、赤い實には手が届きません。届かないのを尙も取らうと、爪立て爪立て、伸上りに伸上つてもがきました。もがいて兩足を踏み直す度に、何やら氣持の悪い泥が、にちや／＼と兩足の指の間へねばり込みました。

どうしても赤い梔子の實は取れません。一つも取らずに生垣を離れた私は、恨めしさうに梔子の實をにらんで居りましたが、あきらめて歸ることにしました。ふと足先を見ると、泥ではなくて穢い物が左右の足の指にべと／＼とねばり着いてゐました。それが何であるかを知ると、俄に異様な臭が鼻を衝きました。

私はねばり着いてゐる穢い物を振落さうとして、足踏をして見ましたが、少しもとれず、益々氣持が悪くなつて、遂々泣き出してしまひました。源兵衛爺の家の婆さんが、
「どうしやあなも。」

と言つて出て來ると、私は一層大きな聲をあげて泣き立てました。婆さんそれと氣が附くと、



「泣かんでもいいぞえも。」

と言つて、庭先へ連れて行つて、ざぶ／＼水をかけて洗つて呉れました。

「さあ、下駄を穿きあせ。」

何時の間にか泣き止んだ私が下駄を穿くと、婆さんはからの重箱を提げて、私の手を引いて家まで送つて呉れました。

梔子の赤い實は來る秋毎にえも言はれぬ麗しい艶を見せて、源兵衛爺さんの生垣の間から覗いてゐました。私は其の赤い實に、いつも心を引かれましたが、決して取らうとはしませんでした。

せきれいや水裂けてどぶ石の上

鬼 城